

ドラッカー学への招待

第62回

ドラッカーのささやかな知恵⑧
——社会生態学者になってみる

ものづくり大学特別客員教授 井坂康志



社会生態学者とは何か

社会生態学とはドラッカーによるオリジナルの学問だ。基本アプローチは、「人と社会を、批判したり価値判断を交えずに、ありのままに見ること」によっている。

その目的は、「変化を見つける」ことにある。しかも、今すぐに、誰もが身の回りの観察からスタートできるのがありがたい。

まずは、人の行動に理解を示すこと、これがはじめである。誰かの反応や感じ方に純粋な好奇心を持つのだ。「それは間違っている」とか、「こうあるべきだ」というのは社会生態学者の見方ではない。

「なるほど、そういう見方があるのか」「何がこの人にこのような行動を取らせているのだろう」と心の中でつぶやくのが社会生態学者である。人が奇妙な行動を取ったときほど、好奇心の度合いは高まっていく。

社会生態学者になるには、まず純粋な気持ちで、「違うこと」に肯定的になる必要がある。変化はよいことなのだという前提を受け入れる必要があるのだ。

科学者のライプニッツは、さる名家の家庭教師をしていたとき、子どもに広大な庭園に舞う枯れ葉を二枚取りに行かせて、二つを比べ、「みな似ているけれど、同じ葉は一枚もないのだ」と教えたという。人と社会も同じだ。

「違い」は価値の源泉

違うことがよくないとするなら、どうだろう。どこかに正しい人や社会があるはずだ。そして無数の間違った人や社会があるはずだ。ならば、正しい人や社会だけ残して、間違った人や社会は捨ててしまおう、この考えに一直線である。この考え方が、20世紀の社会をものすごく住みにくくしたことだけは間違いのない事実である。

社会生態学者になることで、もっと柔軟な見方ができるようになる。みんな違っている。それはよいことだ。いや、よいことである以前に、私を取り巻くあるがままの現実なのだ。私たちにできるのはそれを受け入れることなのだ。

違いや変化を受け入れることは、あらゆるものを擁護することではない。人にはそれぞれの

人の生き方がある。違う人種、違う宗教、違う性格……、人にそれをすすめる必要はない。一方で、批判する必要もない。社会生態学者として生きていくと決めると、無駄なエネルギーを使わなくなる。そして、あるがままの生命の源に近づいていける気持ちになっていく。

知覚の知られざる力

社会生態学は知覚を大切にす

「なぜあのときにびんときて動けたのだろう——」。

人にはなぜか理由は説明できないけれど、わかることがある。それは外部の世界をトータルに感じ取っている場合が多い。これを知覚の作用という。知覚はいわゆる直感や靈感ではない。対象のかたちを見て、その印象によって形成されるものだ。

たとえば人の表情などがそれにあたるだろう。喜怒哀楽などは表情を見れば誰でもある程度はわかるものである。同じことを社会に対しても行ったのが、知覚を重視した社会生態学者ドラッカーだった。

だが、ときに私たちの多くは、知覚の教える印象に耳を貸

そうとしない。そんな理屈で証拠だてられていないあやしいもので結論を出せるわけがないと思う。

逆に言うと、現代人は論理的思考によってしか正解は出ないと思っているとかがある。何らかの論理の実証を経ないものは信じるに値しないと自分自身を日々熱心に説得し続けているのが私たちなのだ。

しかし、知覚はあてになる。このことを認めさえすれば、観察者としての腕はめきめきと上がっていくだろう。知覚の作用を自らの武器にしながら、論理的思考も取り入れれば、最高の観察者になる条件としては十分である。

知覚を活用する方法

知覚を活用するのに慣れていないなら、まず観察対象を決めて、静かに意識を傾けることだ。それは何でもいい。街ゆく車のデザインでも、渋谷の人波の表情でも、電車内の中吊り広告でもいい。

ポインントは目を働かせて、口を閉じることだ。目から入ってくる印象に神経を集中させることだ。何か感想を言いたくなっ

てもそれをがまんし、いろいろなかたちや色が目に入ってくるに任せる。

たったそれだけだ。それを何度も繰り返す。やがて、観察対象自身が、あなたに語りかけるように感じてくるだろう。

ドラッカーは日本画を鑑賞することで、この知覚の力を養っていた。

日本人は知覚の民であると彼は述べ、高く評価してくれていた。だから、あなたや私にも、知覚を養い利用する力は十分に備わっているのだ。今日から知覚を育ててみよう。

次に何にアプローチすべきか、あるいは距離を置くべきかわかるようになるだろう。

この世界を複雑にするよりも、あるがままの現実を単純に受け入れるほうがはるかに簡単である。

言葉が世界を広げてくれる

社会生態学を志す者にとって、言葉こそは最高の善であり、最高の武器である。

多くの人は自分の限界を自分で設定している。「世の中はこのようなものだ」「前からそう決まっているんだ」「自分には

できない」などの言葉でその限界は表現されることが多い。

ところで、言葉が私たちの意識を形成する強力な道具であることは知っているだろう。一度それができないと思えば、自分の言葉で設定した意識の壁を乗り越えるのはとてもむずかしくなる。

反対に言えば、言葉を知ること、世界を広げることができないのも確かだ。新しい言葉、美しい言葉を自分の世界に引き込んでいく。これは信じられないほど効果的な世界を広げる方法である。

読書の効用

ありあわせの言葉で広い世界を狭くする必要はない。多くの場合、思考の限界は言葉の限界だ。言葉のリストをえんえんと増やしていくことで、「世界はこういうものだ」という思い込みや固定観念まで崩れていく。

やはり人生の味わいや機微を教えてくれるのが、読書である。言葉で世界を広げる王道であり、いちばん簡単な練習方法だ。

ドラッカーのお気に入りの書齋には、経営書やビジネス書は

ほぼなく、文学、哲学、芸術関係の書物で書棚は埋め尽くされていた。

特に文学だ（彼の書物のタイトルが——たとえば、『経済人の終わり』『断絶の時代』『新しい現実』など——とても文学的に洗練された語感を持っていたのは、読書の趣味も反映しているのを見ていいだろう）。

小説や詩の世界は、私たちの限られた視野や期待に別の人生からの光を当ててくれる。自分の世界の限界から抜け出す最初の一步は、小説を手にとることかもしれない。

いきなり重たい小説では負担になるなら、短編小説から入るのもいいだろう。ヘッセやディッケンズ、吉田兼好、芥川龍之介などの国や時代の違う短い作品を何度も味読してみるといいかもしれない。

ある程度の年になると、速読よりも、ゆっくりと読むほうがいい。とにかく言葉の温泉にゆったりとつかないように、心をのびやかにすることだ。

自分の世界の限界は単なる言葉の癖だと知ることだ。昔の癖が出そうになると、別の人生からそれを眺めてみるのだ。